

読者のページ

School Teacher @ Voice

特集

私達にとって
あの震災は
何だったのか...



わずかに看板だけが残る鷹取商店街



猛煙に包まれる神戸市の鷹取地区

あの震災の体験は忘れようとしても決して忘れることができない。しかし、29年という月日は確実に記憶を不鮮明なモノにしていく。今、ここに活字として残すことで、少しでもあの時の記憶を正確に残すことができればと考え、ここに記しました。

令和6年1月10日
福田 浩三

① 震災、その瞬間...

1月17日は3連休明けの火曜日であった。早朝、まだ周りが暗い中、突然その揺れは始まった。いや、揺れとは言えない。下から突き上げる波に私は身体をのまれた。揺れる御輿(みこし)の上に乗っているかの如く、その揺れは私の身体をはね飛ばし、転がっていた。

『地震だ!』という認識などできない程に経験したことのない揺れであった。二階に寝ていた私は這って、階段までたどり着いたが、そこにあるはずの手すりは既になく、四つん這いのまま、半ば転げ落ちるように階段を下りていった。

台所にたどり着くと、テーブルの下に両親が居て、入るように促された。テーブル下に入ったものの、『これじゃ、家もたない!』と思いきや、揺れが少し落ち着いたときに勝手口から外へ出た。扉は倒壊し、暗い夜空を明らかに稲妻とは異なる不気味な光が走っていた。

多くのビルが1階部分を押し潰されて倒壊した



② 朝を迎えて

テレビも映らず、何が起ったのか全く分からなかった。電気は止まり、家の外ではガスの臭いが立ちこめていた。蛇口をひねっても水は出ない。携帯電話も連絡が取れない。日が昇り、瓦の落ちた家や穴が空いた壁、崩れた崖などを目の当たりにし、徐々に状況が掴めだした。電池で動く携帯テレビがあったのを思い出して、それを探した。そしてようやく淡路島が震源の地震であり、高速道路が倒壊した等の状況は全く報道されなかった。いや、報道局も掴めていなかったのだ。幸い、我が家の電気は当日中に復旧した。水道も4日後に使えない間はトイレも流せない為、極力水分をとる事を控えた。トイレは風呂の残り水を大切に活用していたので、水道の復旧は本当に有難かった。しかしガスだけは、その復旧までに3週間を要した...

横倒しになり道を塞ぐビル



③ 心の引っぱり

当時、私は神戸と明石の大阪の3カ所に仕事をしていた。しかし神戸と明石の仕事は震災のためしばらく自宅待機となり、収入源確保のため、交通網の寸断された大阪まで通う必要があった。片道5時間、電車が徒歩、代替バスを乗り継ぎ職場に通った。時には大阪の親戚を頼りにして、震災翌日より新聞は配達

④ 確認

震災から既に1週間以上が経過していた。電話も比較的繋がりがやすくなった。私は東京に居るはずの女性の兄に電話をかけた。その兄とは以前、塾で同僚として働いた事があり、年賀状のやりとりで東京の連絡先も知っていた。しかし、何度電話をかけても電話は繋がらなかった。

夕方かけた電話が留守番メッセージに繋がった。そこには、しばらく奈良の叔父の家に居る旨のメッセージと、その連絡先番号が吹き込まれていた。私の番号に電話をし、私話をする事ができた。女性の家は地震で倒壊し、直後の火災で全て消滅してしまっていた。女性は家の倒壊時点で既に息絶えており、その後火事であらう事

がせめてもの救いである、そう叔父は話をしてくれた。実際の事は誰にも分からない。しかし、私も同じ思いであった。その日の夜、ようやく女性の兄と直接電話で話をすることができた。「新聞で妹さんの名前を見つけて!」そう、切り出した私に、「そうなんですよ!」と、電話越しに少しおどけたように兄は返事をした。私はそこに、家族4人を一度に失った彼の戸惑いを感じずには居られなかった。その後何話をしたか、私は今も思い出せない。

『女性一人家屋の下にいます』救出を訴える張り紙



⑤ 弔い

週末の土曜日、私は塾でその女性と一緒に教えていた元同僚を誘い、女性の家を訪ねる事にした。花屋で花を買ったとき、震災で亡くなった人を弔う花で告げると、店員さんはとても丁寧に花束を作ってくれた。私はその花屋で線香も一束購入した。

須磨駅まではJRで行った。当時は須磨駅以東は私鉄を含め全線不通であり、板宿の現場には須磨駅から徒歩で向かうしかなかった。須磨駅周辺は、瓦の飛んだ家が至る所にあつたが、傾いたり倒壊した建物はあまり見られなかった。しかし板宿に近づくにつれて、崩れた建物や消失した区画を目にするようになった。大体この辺りだろうという所に来たが、はつきりとした場所が分からないうちに水道管が破裂し、流れ出た水は側溝を小川にかえていた。その水で洗濯をしていた中年女性に道を尋ねた。すぐ返事があつた。

「〇〇さんは分らないけど、一家4人が亡くなった家はその真だよ。」教えてもらったところには何もなかった。家が5/6件程あつたであろうその区画は、土台を残し全て炭になつていた。白い灰ではなく、黒い炭であつた。確かに、その場所間違いがなかった。うすうすと、そこに家があつたときの記憶が思い出された。

悔しかった...

⑥ 帰路

元同僚と2人、女性の家を後にした。帰りは須磨駅まで山陽電車の線路を伝っていく事にした。山陽電鉄も不通が続いており、線路上を歩く事が危険な方法であった。JR須磨駅に着いた。電車に乗ると、その電車が大きく揺れた。震度4の地震であった。この頃は、まだ頻りに余震があつた。余震の度に、本震を思い出し、身体は固まり、言いようのない無力感と惨めさに苛まれた。

⑦ 不条理...

『神は乗り越えられない試練を与えない』という。残された人々にとつては、あの震災は乗り越えなければならぬ試練だったのかもしれない。しかし突然命を奪われた人達にとって、あの震災は『試練』だったのだろ。うか。いや、『試練』であるはずがない。不条理とはいえない。不条理とはいえない。不条理とはいえない。

焼跡で線香をあげる父娘



無事を伝える張り紙も...



掲載写真はインターネットの「神戸新聞NEXT」写真で見られる「毎日」より転載致しました。

震災を知らない世代にも、何か少しでもいいから伝えたい、残したい、あの時の事... 生死を分けたのは、ホンの偶然だった人も... 今を生きる人に、届いて欲しいこのメッセージ